2022年9月25日  川越教会

丸山　勉

おかえりなさい！

［ダニエル書12章1～13節］

「その時、大天使長ミカエルが立つ。彼はお前の民の子らを守護する。その時まで、苦難が続く 国が始まって以来、かつてなかったほどの苦難が。しかし、その時には救われるであろう お前の民、あの書に記された人々は。 

多くの者が地の塵の中の眠りから目覚める。ある者は永遠の生命に入り ある者は永久に続く恥と憎悪の的となる。 目覚めた人々は大空の光のように輝き 多くの者の救いとなった人々はとこしえに星と輝く。 

ダニエルよ、終わりの時が来るまで、お前はこれらのことを秘め、この書を封じておきなさい。多くの者が動揺するであろう。そして、知識は増す。」 

わたしダニエルは、なお眺め続けていると、見よ、更に二人の人が、川の両岸に一人ずつ立っているのが見えた。その一人が、川の流れの上に立つ、あの麻の衣を着た人に向かって、「これらの驚くべきことはいつまで続くのでしょうか」と尋ねた。すると、川の流れの上に立つ、あの麻の衣を着た人が、左右の手を天に差し伸べ、永遠に生きるお方によってこう誓うのが聞こえた。「一時期、二時期、そして半時期たって、聖なる民の力が全く打ち砕かれると、これらの事はすべて成就する。」こう聞いてもわたしには理解できなかったので尋ねた。「主よ、これらのことの終わりはどうなるのでしょうか。」彼は答えた。「ダニエルよ、もう行きなさい。終わりの時までこれらの事は秘められ、封じられている。多くの者は清められ、白くされ、練られる。逆らう者はなお逆らう。逆らう者はだれも悟らないが、目覚めた人々は悟る。日ごとの供え物が廃止され、憎むべき荒廃をもたらすものが立てられてから、千二百九十日が定められている。待ち望んで千三百三十五日に至る者は、まことに幸いである。終わりまでお前の道を行き、憩いに入りなさい。時の終わりにあたり、お前に定められている運命に従って、お前は立ち上がるであろう。」

[１] 象徴的な「ダニエル書」

　「ダニエル書」を読む最後になりました。このダニエル書の中心的な部分は「終末」に関する言葉・預言だと言われています。新約聖書の「ヨハネの黙示録」も同じ「黙示文学」と言われるもので、シンボリックな言葉に溢れていて分かりづらい文書だと言えると思います。そこには時代背景があり、当時は信仰者への迫害が強かったので、権力者の名前も、或いは時代なども脚色しながら、しかし信仰に生きる者たちを励ました書物であるようです。

私自身は、こういった文書の言葉はこのような意味である、という解釈には疎いと思います。正直言ってあまりそういう解釈学には興味が持てないのです。ただ、そのようなことを良く調べる学者もいますので、興味がある方はインターネット等で調べて頂ければと思いますが、ただ一つ不注意すると、これらの黙示文学を破滅的な文書、或いは魔術的な文書として学ばないで欲しいということです。これは信仰者への励ましの書、深い慰めの書だからです。私たちは象徴的な語を「説明」されると、まるでパズルがはまった様に納得してしまうことが多くありますが、私自身は、「信仰」とは、必ずしも「納得」出来なくても良いと思っています。神様と私たちの関係はある意味、親しい人間関係と似ています。本当の‟親しさ”とか‟愛”というのは「納得」じゃないですよね、「納得」出来なくてもその人を信頼することだと思います。評価することではなくて、信じることだと思います。「評価」の関係であれば、すぐに破れてしまうでしょうし、第一、聖書を読んでよく見えてくることは、神様は私たちを、いわゆる「評価」をして切り捨ててはいない、ということではないでしょうか。

[2] 「命の書」

先ほど12章を読んで頂きましたけれども、これは本当の最後の頂点なのですが、そこに至る迄の10章や11章の中では、これからどんどん政治的に悲劇的な状況が襲ってくること、権力者が我が物顔でこの世を支配し、それに逆らう者たちは弾圧され、犠牲になる者も出ることが語られます。しかし、その一方で、必ずそのような状況、世界には「終わり」の時が訪れるのだ、ということが語られています。その点がオカルト的なものとの決定的な違いです。悪魔的な状況は永遠ではないのです。悪魔は勝利しない。この世界は悪魔が誇っているように見えるけれども、それは見えるだけなので、この世界を本当に保持し、支配し、完成させるのはサタンではなく神様なのだというのが、聖書の黙示文学のメッセージです。

ですから、私たちはいくらでもこのような箇所から励ましの言葉、慰めの言葉を見出すことが出来ます。例えば、12章の1節以下をもう一度少し読んでみます。―「その時、大天使長ミカエルが立つ。彼はお前の民の子らを守護する。その時まで、苦難が続く 国が始まって以来、かつてなかったほどの苦難が。しかし、その時には救われるであろう お前の民、あの書に記された人々は。 」―ここに「あの書」という語が出てきます（4節にもある）が、これは新約聖書のフィリピ4章3節や、黙示録3章5節にもあるように、「命の書」のことです。「お前はわたしの子だ、わたしの命を受け継げ」という、神様ご自身が持っておられる、名前が記された巻物です。誰がこの巻物に名が記されているのか。人間的には力、才能、富のある者が尊ばれますが、この書に名が記された者は、神に信頼し、最後まで耐え忍ぶ者たちです。けれども、強い者ではありません。自分の罪や弱さに泣き、ただイエス・キリストの救いに依り頼む者です。「あなたは私の神」と、信仰告白をした者です。今日、後で歌いたい讃美歌は、そのことを明るく歌った歌です。―「世の終りのラッパ鳴り渡る時　世は常世(とこよ)の朝となり　救われし者は四方(よも)の隅(すみ)より　全て主のもとに呼ばれん　（おりかえし） その時わが名も　その時わが名も　その時わが名も　呼ばれなば必ずあらん！」

まことの親である神様が、子である私たちの名を呼ぶということ。考えてみると、私たちはきっと名を呼ばれながら成長してきたのですね。Aさん、Bさんではなく、固有名詞を呼ばれて大きくなってきた。それで叱られる、ということもあるかも知れないけれども、どうでも良かったら、名前を呼んで叱るということはないでしょう。増してや、私たちはかつては、皆「失われた者」でした。帰る道が分からなくて迷子になってしまった者でした。そんな者のことを、まことの親である神は、私たちの名を呼び続け、捜し続けて下さった。「見つけ出すまでまで捜さないでろうか」と、イエス様はあの一匹の羊を捜す譬え話で語られましたけれども、「命の書」というのは、そのようにして捜し出された私たち一人ひとりの名が記されている、あの十字架の血を用いて書かれた、決して消えない神の国の住民票です。だから大丈夫。たとえこの世の状況は「どこに神がいるのか」と思えるようなものであっても、他ならぬイエス・キリストがその絶望的現実を経験し、十字架にかかられ、しかしそれで滅ぼされたのではなくて、死を打ち破って下さったお方として、私たちを愛し、名を呼び、今共におられるのです。私たちは、その究極の日を先取りした望みを持って、この一日を生きているのです。

[3] ダニエル書と先住の主イエス・キリスト

ダニエル書では、これは人となられる前のイエス・キリストのことを暗示しているのではないかと思われる不思議な幻が描かれています。10章5節以下にはこうあります。「（ダニエルが）目を上げて眺めると、見よ、一人の人が麻の衣を着、純金の帯を腰に締めて立っていた。体は宝石のようで、顔は稲妻のよう、目は松明の炎のようで、腕と足は磨かれた青銅のよう、話す声は大群衆の声のようであった。」この麻の衣を着た者が最後の12章にも表れます。5節以下です。「わたしダニエルは、なお眺め続けていると、見よ、更に二人の人が、川の両岸に一人ずつ立っているのが見えた。その一人が、川の流れの上に立つ、あの麻の衣を着た人に向かって、「これらの驚くべきことはいつまで続くのでしょうか」と尋ねた。すると、川の流れの上に立つ、あの麻の衣を着た人が、左右の手を天に差し伸べ、永遠に生きるお方によってこう誓うのが聞こえた。「一時期、二時期、そして半時期たって、聖なる民の力が全く打ち砕かれると、これらの事はすべて成就する。」―不思議な描写ですが、この麻の衣の人は、辛い現実の中にいるダニエルを励まし、また苦難が終わる時期が必ず訪れるのだ、と宣言しています。「左右の手を天に差し伸べ、永遠に生きるお方によってこう誓う」とありました。主イエス・キリストと父なる神の間の契りがここにあります。これは凄いことです。その成就までの時の長さについてはあまり拘らなくて良いと思います。大事なのは、神ならぬ者の支配は永遠に続かず、結局は神の勝利に飲み込まれてしまうということです。この、最後の12:13の言葉は素晴しいですね。このダニエルに語られた言葉を、主イエスが、悩みながらも信仰に生きようとしている私たち一人ひとりに語られている言葉として聞いて良いのだと私は思います。―「終わりまでお前の道を行き、憩いに入りなさい。時の終わりにあたり、お前に定められている運命に従って、お前は立ち上がるであろう。」

あなたを待っているのは、真の「憩い」なのだと言うのですね。それが与えられるのがいつなのかは分からない。でもそれでいいのです。私たちと出会うために待ち焦がれているお方が、かの日に「良く生きて来たね。おかえりなさい！」と必ず迎えて下さいます。私たちの名を呼んで、です。その日に向かって、あなたは今与えられている信仰と共に、立ち上がって生きよと呼びかけているのです。

最後に、招きの聖句でも読んで頂きました、新約聖書コリントの信徒への手紙二の5章からの言葉を続けて読んでお祈り致します。お聞き下さい。―「わたしたちの地上の住みかである幕屋が滅びても、神によって建物が備えられていることを、わたしたちは知っています。人の手で造られたものではない天にある永遠の住みかです。わたしたちは、天から与えられる住みかを上に着たいと切に願って、この地上の幕屋にあって苦しみもだえています。それを脱いでも、わたしたちは裸のままではおりません。この幕屋に住むわたしたちは重荷を負って呻いておりますが、それは、地上の住みかを脱ぎ捨てたいからではありません。死ぬはずのものが命に飲み込まれてしまうために、天から与えられる住みかを上に着たいからです。わたしたちを、このようになるのにふさわしい者としてくださったのは、神です。神は、その保証として“霊”を与えてくださったのです。それで、わたしたちはいつも心強い」。アーメン。

主なる神様、時々この世界で生きて行くことが嫌になってしまう者です。しかし、その原因を作っているのもまた私たちです。戦争、差別、また自然災害をもたらす環境破壊、人は「終末的様相」と言う人もおります。そうなのかもしれません。しかし、まず私たちと神様との関係を修復することをさせて下さい。真実な悔い改めを与えて下さい。主が「おかえりなさい」と迎えて下さる時まで、耐え忍びつつ、しかし、置かれている環境、人間関係の中で、あなたの愛を映し出して生きて行く者として、聖霊によって絶えず新しく導いて下さい。十字架と復活の主イエス・キリストのお名前によって祈ります。アーメン。